８学年通信 **Challenge yourself**

渋谷本町学園
第１８号　令和３年９月１８日（土）
加藤　直子

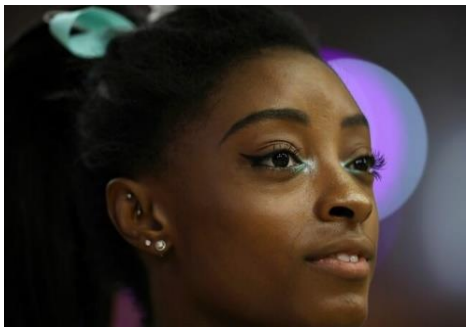
Welcome Back!!!

今夏、コロナ禍のなか、オリンピック・パラリンピックが行われた。少し前の話だけど、みんな、結構観ましたか。

さて、競技の結果はさておき、今回は選手たちの発したメッセージの多い大会であったと思う。世界中の人たちに、自分が自分であることを、自分らしく大切に生きることを伝える選手がたくさんいた。

私は女子体操競技を観るのが好きだ。この競技ではドイツの選手たちが、肌の露出が多いレオタードでなく、「ユニタード」で出場した。「ユニタード」とは、足首まで生地で覆われたもの。性的魅力を過度に強調したり、評価する「セクシャライゼーション」に反対する意味があった。選手の１人は、レオタードを否定するのではなく、「何を着るかは、女性自身が選ぶべきだ」と強調した。

ちなみに、オリンピックの直前にヨーロッパで開かれたビーチハンドボールでは、ノルウェーチームが規定のビキニではなく短パンで出場。こちらは罰金を科せられた。これに対し、ノルウェーのハンドボール連盟は、チームの決断を誇りにした。なお罰金は性差別に反対する米歌手によって肩代わりされたそうだ。



アメリカ選手にシモーネ・バイルズという素晴らしい選手がいる。体操界の女王で、今回も多くのメダルを期待されていた。が、団体決勝の途中で棄権した。「メンタルヘルス」の問題が理由で。彼女はストレスから心に大きな異変を感じ、自分の心の健康を優先し、途中棄権を決断した。これに対し、アメリカの多くの人々が彼女の勇気ある決断を誇りに感じている。たくさんのサポートメッセージが送られたらしい。これがどの国の選手でも、国民は同じ反応だっただろうか。シモーネの「私の人生は体操だけではない」という言葉は心に残った。

また、コスタリカのルシアナ・アルバラド選手は、床の演技の中に「ブラックライブズマター」（黒人の命も大切だ）運動の象徴となった片膝付きで拳を突き上げたポーズを入れ、人種差別への抗議の思いを込めた。「私たちはみんな同じ。美しく素晴らしい。」と。

体操から離れ、水泳男子高飛び込み。金メダリストのイギリスのトム・デーリー選手。金メダルを入れる可愛いお手製のメダル入れを披露した選手である。彼は同性愛者。カミングアウトをしたのは８年前。それまでは数々の葛藤があったというが、今は最も有名なゲイアスリートの一人として堂々としている。現在はパートナーと結婚し息子を育てているそう。プールサイドで編み物をする彼の姿が注目をあびた。

みんなはどんな夏休みを過ごしたのだろう？　学校から離れた７週間、そして分散登校の２週間。

多くの時間を家で過ごした人も、出かけた人も、部活や塾で忙しかった人もそれぞれ、普段と違うものを見て、感じて成長したのだろうな。これからも、またいろいろ話し、一緒にがんばっていきましょう。

※　来週９/21(火)からは、通常登校となります。